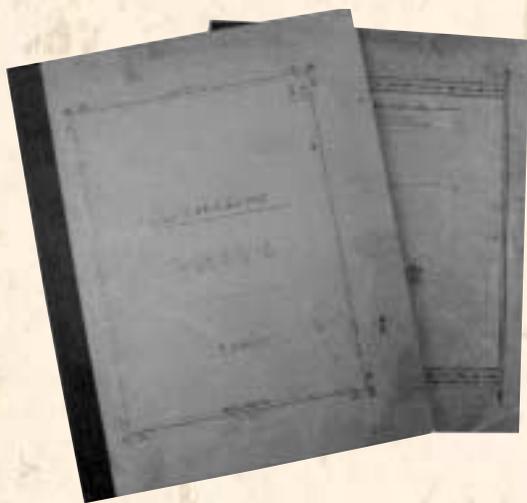


このとき、幸恵の語学の才能を見抜いた金田一は、女子職業学校の卒業後上京し、自らの語学研究の助手を務めてくれるよう誘いましたが、気管支カタルを患っていた幸恵は無理がきかない体であったため断り続けました。

金田一は「子どもの頃から聞き覚えたユーカラなどをローマ字で書き記して欲しい」と、ノートを添えて依頼。幸恵は持ちまへの語学の才能により短期間にしてローマ字を習得し、ローマ字によるアイヌ語表記の作業を開始しました。

「今日は6月1日、1年12ヶ月の第6月目の端緒の日だ。私は思った。」

此の月は、此の年は、私は一たい何をなすべきであらう……昨日と同



『知里幸恵ノート』と言われるもの（平成14年8月知里森舎により復刻）。  
金田一から受けたノートには左頁に文字のないアイヌ語をローマ字表記し、右頁に日本語による翻訳をしました。

じに机に向かってペンを執る、白い紙に青いインクで蚯蚓の這い跡の様な文字をするす……ただそれだけ。ただそれだけの事が何になるのか私の為私の同族祖先の為、

それから……アコロイタク（アイヌ語）の研究とそれに連なる尊い大仕事をなしつつある先生に少しばかりの参考の資に供す為、学術の為、日本の国の為、世界万国の為、……何と云う大きな仕事なのだらう……私の頭小さい此の頭、その中の小さいものをしぼり出して筆にあらはす……ただそれだけの事が——私は書かねばならぬ、知れる限りを、生の限りを、書かねばならぬ。輝かしい朝——緑色の朝。」（知里幸恵の日記1922年6月1日から引用）。

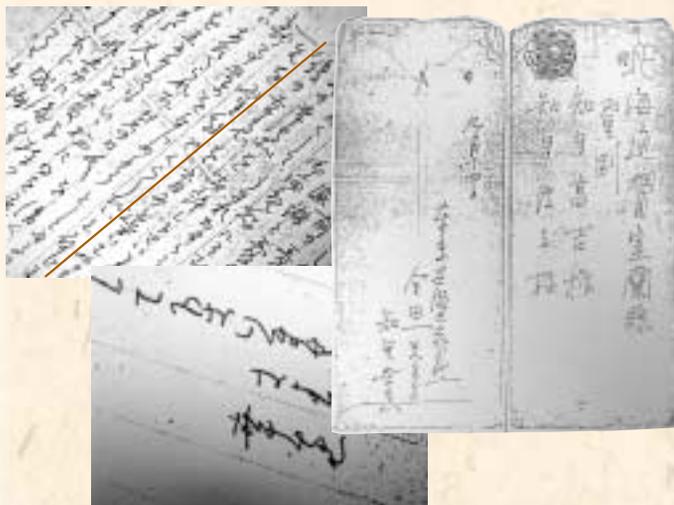
## 一生を登別でくらしたい

「上京へ、幸恵・その死」

金田一に送ったノートの中の神話は、民俗学者柳田國男たちのなかで話題となり出版の話が進みました。1922年（大正11年）5月、幸恵は校正も併せ、金田一の研究助手を務めるために上京を決意します。

東京での慣れない暮らし。経験したことのない梅雨、猛暑。幸恵は、4カ月の東京での生活を日記につづり、故郷や家族のこと、アイヌ民族の今とこれからを想いました。

7月30日、心臓発作が幸恵を襲います。衰弱してゆくなかで幸恵は「一生を登別でくらしたいと存じます。」（両親あての最後の手紙1922年9月14日引用）と、両親にあてた手紙にしたためています。



幸恵の両親あての最後の手紙。4枚目に「一生を登別でくらしたいと存じます」としたためている。

つたかのように、ふるさと登別への13年ぶりの帰郷を決意したのでした。しかし、その帰郷の願いもむなし、1922年（大正11年）9月18日、幸恵は心臓の発作を起こし金田一家の人びとに見守られながら19年3カ月の生涯を閉じました（東京雑司が谷墓地に埋葬）。